

---

a daydreamer **生絲**

修司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

a daydreamer 生絲

### 【Nコード】

N9850F

### 【作者名】

修司

### 【あらすじ】

世の中は常識で満たされている。幼き日の夢を砕かれた生絲の前に現れた常識から逸脱した『非常識』である魔女の存在。砕かれた夢の破片を『非常識』の中に見た生絲は……

## 生絲 1

俺は小さい頃、ありきたりだが『正義のヒーロー』ってやつに憧れた。

当時人気だった特撮番組。迫り来る怪人にヒーローがパンチやキックを浴びせ、最期には必殺技の光線で木っ端微塵にして決め台詞。『俺がいる限り、悪の蔓延る世は来ない!!』  
言葉の意味も、そして悪がなんなのかもまだ分からなかっただろ。番組の内容も。

だが、テレビ画面に大きく映るヒーロー、背後の爆発、そして力強い声。背筋がぞくぞくと震え、気が付いたら手は拳の形を作っていた。

俺もヒーローになる!

幼い俺は、この現実で、正義のヒーローが今日もどこかで怪人と戦っていると信じていた。

あの決め台詞を言うために。

強い憧れを抱いた俺は、ヒーローになりたくて、修行と称して森の中を駆けずり回ったり、純粹ゆえに残酷だが、野良犬退治などして毎日を過ごした。ケンカを目撃すれば、人の少ないほうに味方するように首を突っ込み、もみくちゃにされて怪我をすることも少なくなかった。

幼いがゆえに、純粹がゆえに一生懸命に修行をしていたんだ。

ホントはね、正義のヒーローなんていないんだよ。

幼稚園の先生が俺に、諭すように言ったことがある。

俺はその言葉の意味が、当時、全く理解できなかった。

幼稚園児の夢を壊すようなことを、ヒーローの存在を信じて疑わない俺に、先生が言ったのは何故だったかな。

そんなことはない、ヒーローは俺が今こうしている間にも、

どこかで怪人をやっつけているんだ。

いないはずはない。俺はテレビで見たんだぞ。

今考えれば、それは子供の子供らしく微笑ましい夢であり、可愛らしい言い分で、ヒーローが実際にいないことは息をするように当然のことだけども。

だけど、まだ幼い俺は、純粹で無知だったから。

先生の言葉の意味が、全く、理解できなかつたんだ。

それが少しずつ大人になって、理由が解っていくんだ。

こんな憧れの空想から遠く離れた現実で日々を過ごし、成長していくうちに俺の憧れは少しずつ砕かれ、磨り減り、灰になる。代わりに、少しずつ常識が俺の中でその存在を大きくする。

空想を空想と決定付ける抑止力の存在。法律だったり、世界構成だったり、物理法則だったり。

少しずつ、少しずつ。

今日、わかったことがある。怪人という悪い奴は実在しないんだ。今日、わかったことがある。光線って生身では出せないんだ。

俺は 正義のヒーローにはなれないんだ。

俺にとって成長は、正義のヒーローへの夢が空想という言葉に変わる過程だった。

さすがに二十歳にもなれば、夢と現実をごっちゃに考えることもない。

ヒーロー？ あんなものはタイツの中に俳優と呼ばれる人が入っているだけ。羊の皮を被った狼は狼であるように、ヒーローのタイツを被った普通の人は、普通の人だ。

正義のヒーローは、誰かの創り話。常識がそう言っている。現実には常識で満たされている。

それとも、常識で満たされた世界を現実というのか。

どちらにせよ、俺は現実の中で生きていることに変わりはないし、

子供の頃の憧れは空想の世界だ。

世界はとても暗い 夢が無い。

この世界が暗いからこそ、空想は今も俺の手の届かない場所で輝きを失わないでいるのだろう。

輝く世界では、俺は平和を脅かす怪人と死闘を繰り返している。

暗い世界では、俺は時給の安いアルバイトをして、日々を怠惰に過ごしている。

幼い日に気づいた事実。

いつからか、すっかり俺は修行も止めてしまっている。敵を倒すパンチやキック、そして敵を木っ端微塵にする必殺技の習得も諦めた。

気づいてしまったから。

そんなことをしても、俺はヒーローにはなれない。

だから、修行をする意味がない。

だから、俺はこんなにも現実を見ている。

だから。

コンクリートの壁を素手でぶち抜く男が、今まさに俺のことを殺す気にいるっていう事態に、俺は対抗する術を全く持たない状態だった。

最後の客が店を出て行く。

もうすぐ午前2時。マニユアルにある閉店時間を2時間もオーバーしてやっと今日の勤務が終わる。

最後の客が使ったテーブルをざっと見回り、忘れ物がないことを確認してから入り口の自動ドアの電源を落とす。あとは簡単な掃除と売り上げの集計をしてやっと帰ることができる。

はあ、と深くも無い溜め息をついた。だが浅くもない。

俺はよく溜め息をつくことがある。学校で出された課題がうんざりとする量だったとき、または友達と喧嘩をしているとき、そのほかにも様々の状況で溜め息をつく。しかし、それ以上に自分でも理由のわからない、無意識のうちに溜め息をついている回数のほうが多い。特に一人になったときなど気がついたら、という風に。今ついた溜め息もそのパターンだ。自分でもこの癖を直さなくては、と思っている。一つ溜め息をつくと一つ幸せが逃げる。そんな言葉は嘘だ。溜め息をついた数だけ幸せが逃げていくのだとしたら、俺は恐らく何千回、何万回と溜め息に乗せて幸せを逃がしていたということになる。自分に何万个もの幸せがあつたとは思えない。だが不幸だったとも思っていない。

「まあ周りには辛気くさいやつだとは思われるな」

閉められて誰もいなくなった店内で独り言を漏らす。店内の西一面に張られた鏡に映った自分の顔にはいつものまにやら自嘲的な笑いが浮かんでいる。下らない思考に耽っていたもんだ。さっさと閉店作業をして――

「ん？」

一面ガラス張りとなっている北側から見下ろせる駐車場に緑色の大型バイクが一台、ぽつんと停まっているのが見えた。持ち主と思しき人が煙草をふかしながらこちらを見上げている。

お客さんだろうか？ 急いでカウンター周り以外の照明を落とす。もう閉店しましたよアピールだ。階段を上ってきててももう店を開ける気はないが、それを説明するのも面倒くさい。このアピールで素直に帰ってもらうのが一番だ。

少し間をおいてもう一度駐車を確認する。ドオン、とバイクがガラス越しでも伝わる心地の良い低音を唸りながら駐車場を出て行くところだった。照明落とし作戦は成功したようだ。立ち上がり良く加速するバイクを店内から見送って、また一つ溜め息をついた。

閉店作業を終えて駐車場に出ると少し肌寒い。まだ五月八日、昼間は半袖で過ごせるけど夜になると長袖じゃないと辛いつていう俺が一番嫌いな季節だ。上着を持ち歩くのが面倒だという理由でこの場に半袖でいる俺は周りから見れば少し季節感のない野郎だと思われるだろう。だが今は夜中、気にする人目は大した量ではない。多少の羞恥を覚えて自転車を漕ぐ。目的地は俺のアパートだ。折りたたみ機能を一度も使用したことがない自転車で人がジョギングする程度の早さで走る。

ゆっくりと流れる景色。黄色から赤に変る信号。虫を寄せ付けるように光を振りまいて人間を吸い込むコンビニ。どれもこれも毎日のように見ているが変化はない。別に変化に期待しているわけでもない。変化なんてないとわかってるけど退屈だ。このまま自転車を進めれば左側に小さな公園がある。そこで毎日のように高校生くらいの男が三人いるのもこれまた変化がない。いつものように少し体の大きい二人が少し体の小さい一人を痛めつける。自転車でその脇を通る俺に小さい一人は助けを求めるような目を俺に向ける。何を期待しているんだか……。俺が間に入ったところで痛めつけられる対象が一人増えるだけだろう。当然、いつものように期待のこもった目線を知らん振りして通り過ぎる。俺の手には負えん。押し殺したような悲鳴をBGMに自転車を家に走らせる。

ドオン、と聞き覚えのある低音がBGMに割り込んできた。どこで聞いたんだろう。音の原因を見つけようときよるときよると後ろを

振り返つたら、また小さい一人と目があつた。気まずい思いをして再度無視を決め込む。

「おい、何見てんだ」

でかい一人は無視してくれなかつたみたいだ。まずい、逃げなくては――

気がついたら俺は地面に頬擦りをしている。じりじりする。

濡れている？ 黒い液体が地面を濡らしている。そんなことはどうでもいい、逃げろ！ あれ？ まっすぐに立てない？ 膝が笑っている。再び地面とこんにちは。脇腹に鈍い衝撃が走つた。一瞬の間を置いてそこに激痛が走る。痛い痛い痛い痛い――

「ほんと、容赦ねえなあ」

「あいつが喧嘩ふつかけてきたのが悪いんだろつが」

「こつち見たただけだろつが？」

「ガン飛ばしてんだろつが」

なるほど、俺は絡まれたわけだ。汚い笑いを顔に貼り付けて高校生が歩いてくる。手にzipproくらいのサイズの石を遊ばせて

「誰だよお前。弱いものイジメは許せません！ てか？ えらいねえ、お前がこのゴミの代わりに俺らのサンドバッグになつてくれるの？」

石が額を襲つた。全力投球ではないがその硬さと重さに脳が揺れる。こんな衝撃を毎日、あの小さい子は耐えていたのか。小さい子はさつきまでの期待がこもつた目とは違つた、俺を心配するような表情で見ている。俺が役立たずつてばれたんだろつな。

「こつちを見る」

イジメツ子に命令をされて、俺は従つた。俺のほうが年上なのは確実だがこの場では暴力が序列を決めている。

「携帯と財布を出せ」

「何のためにですか？」

意識せずに敬語が出た。強いものには逆らえない。



ったのだろう。退屈だと思っていた毎日、それを最悪の方向に脱してしまったのかもしれない。

下衆な笑い声を上げる高校生二人と最低の形で自己紹介をした俺を、体の小さなイジメラっ子は何の表情もなく眺めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9850f/>

---

a daydreamer 生絲

2010年10月9日02時50分発行